
Tales of the Connect

ransu521

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of the Connect

【Nコード】

N7161H

【作者名】

ransu521

【あらすじ】

舞台は、テイルズキャラ達が集まっている、ギルドのような建物。戦争がなくなった大陸では、何者かの介入によって魔物が増え続けていた。そこで、それらを討伐する為に……また、受けた依頼を解決する為に、『ギルドハウス』という建物が建てられる。そこには、何個か部屋がある為に、ギルドハウスで働く人達の多くが、そこに泊まっているという。そんなある日、二人の少年少女が、その建物の前に落ちてくる。いく当てのない彼らは、そこで働くことになる。近々、世界を揺るがす大事件が発生するとも知らずに……。

小説・登場人物・オリジナル技紹介

みなさんこんにちは。

「私立相馬学園」・「a d a i l y l i f e」・「とある脳の複数回路」・「とある都市の破滅計画」等でおなじみの r a n s u 5 2 1 です。

将吾「自分の小説の宣伝をここでするな」

……おい。

まだ紹介も済んでないのに登場してくるな、主人公。

将吾「主人公なんだから出てくるも出てこないも勝手だろ!？」

そんなわけあるか。

この小説は、私の意志のままに動くのだよ、将吾君。

実際、私がまだ君の紹介をしていないから、苗字すら出てないじゃないか。

将吾「くっ……!!」

まあ、それはそれとして、とりあえず超登場人物紹介と行きますか。

将吾「何だよ、どこぞの妹のセリフ丸パクリしたような発言は」

いや、これテイルズの小説ですから。

過去のテイルズシリーズのパロディぐらい出ますよ……分かる範囲で、ですが。

将吾「もしかして、全テイルズシリーズをやったわけではない、と？」

……では参りましょう！！

将吾「逃げたな」

さくらがきしよんじ
桜咲将吾

高校二年生男子。

テイルズ大好き少年である。

面白そうなことがあれば何でも突っ込んでいき、口も少々悪いが、時々優しい所を見せる為、

女子には人気ある。

ただし、他人の恋愛事には敏感なくせして、自分のこととなると鈍感になる為に、本当にタチが悪いと言えるだろう。

テイルズ大好き少年の称号に恥じぬように、ファンタジアからハ―

ツまで制覇しているらしい（何歳だよ、お前）。

短くて茶色い髪、黒い瞳が特徴である。

背は高い方で、武器は日本刀。

型は剣道だが、我流である。

魔人剣等のテイルズ技もきちんと練習していた為か、使うことが出来た。

日本刀という武器だが、魔法も使える。

いわゆる、魔法剣士という職である。

しばくらしのみ
柴倉里美

高校二年生女子。

将吾に勧められたテイルズにすっかりはまってしまった少女である。

ただし、やったことのあるテイルズと言うと、デステイニー・デス

ティニー2・アビス・

ヴェスペリアくらいである。

知識に関しては、将吾よりは劣るものの、結構豊富。

ピンク色で肩より少し下まで伸びている髪と、黒い瞳が特徴的。

性格は、結構人見知りもせず、初めての人でも気軽に話すような人である。

その実、友達想いの人でもある。

武器はロッドであり、職は魔術師。

従来テイルズシリーズ登場キャラ（各登場人物についての紹介は省きます）。

○テイルズオブファンタジア

- ・クレス
- ・ミント
- ・チェスター
- ・アーチェ
- ・すず
- ・ダオス

○テイルズオブデスティニー

- ・スタン
- ・ルーティ
- ・リオン
- ・フィリア
- ・コングマン
- ・リリス

○テイルズオブエターニア

- ・リッド
- ・ファラ
- ・キール
- ・チャット

○テイルズオブデスティニー2

- ・カイル
- ・リアラ
- ・ナナリー

- ・ハロルド
- ・ロニ
- ・バルバトス

○ テイルズオブシンフォニア

- ・ロイド
- ・コレット
- ・ジーニアス
- ・リフィル
- ・プレセア
- ・しいな
- ・ゼロス
- ・クラトス

○ テイルズオブリバーズ

- ・ヴェイグ
- ・クレア
- ・マオ
- ・ユージーン
- ・アニー
- ・ティトレイ

○ テイルズオブレジェンディア

- ・セネル
- ・クロエ
- ・シャーリイ
- ・ノーマ

○ テイルズオブジァビス

- ・ルーク

- ・ ティア
- ・ ガイ
- ・ ジェイド
- ・ アニス
- ・ ナタリア
- ・ アッシュ
- ・ イオン
- ・ シング
- ・ アリエッタ
- ・ ミュウ

○ テイルズオブザテンペスト

- ・ カイウス
- ・ ルビア

○ テイルズオブイノセンス

- ・ ルカ
- ・ イリア
- ・ スパーダ
- ・ アンジュ
- ・ チトセ

○ テイルズオブシンフォニア

・ ラタトスクの騎士 ・

- ・ エミル
- ・ マルタ
- ・ リヒター
- ・ アリス
- ・ デクス

○ テイルズオブヴェスペリア

・ユーリ

・エステル

・カロール

・リタ

・ジュデイス

・レイヴン

・ラピード

・パティ

・ナン

・フレン

○ テイルズオブハーツ

・シング

・コハク

○ テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー

・パスカ・カノンノ

○ テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー2

・カノンノ・イアハート

・パニール

・ゲーテ

計 76人+3匹

オリジナル技

○将吾

・ 灯笼流し…… 刀を一度鞘に収めて、相手の攻撃を待つ。相手が物理攻撃を仕掛けて来たら

その攻撃を弾き、その反動を利用して相手を一閃する技。ただし、魔法系の

攻撃には通用しない。

将吾「これ、マイソロ2よりも登場人物多いんじゃないかねえか？」

マイソロ2の中から省かれているキャラも居ますけどね。

将吾「本当だ……空気王がいねえ。さすがは空気……」

里美「駄目だよ将吾。そんなこと言っちゃ！本当の事なんだから……」

お前が一番ひどいこと言ってるぞ。

里美「あ、あれ？」

将吾「ところで、この小説ってどんな小説なの？」

では、ここで軽く、今小説、『Tales of the Con
nect』について説明いたしましょう。

舞台は、テイルズキャラ達が勢ぞろいしている、テイルズオブスク
ール。

将吾「……学園？」

学園でありながら、何故か戦闘シーンあり。

里美「……えっと、先がまったく見えないのですが」

ネット上に何個もあるテイルズの学園パロディですが、前代未聞の
大ピンチが！？

将吾・里美「いや、ないから」

私作者ですよ！？

作者の思い通りに進むのが小説ってものでしょうが……！

将吾「ちつとは、この小説を読んでくださるだろう人達の気持ちと

か考えやがれ」

……私、人の心読むの苦手なんだよね。」

里美「なら、読めるように勉強しなさい……てか、それは全然関係ないわよ」

あれ、そうかな？

ま、いつか。

気を取り直して、今小説の説明に参りましょう。

将吾「やっぱり学園物ではないんだな」

舞台は、テイルズキャラ達が集まっている、ギルドのような建物。戦争がなくなった大陸では、何者かの介入によって魔物が増え続いていた。

そこで、それらを討伐する為に……また、受けた依頼を解決する為に、『ギルドハウス』という建物が建てられる。

そこには、何個が部屋がある為に、ギルドハウスで働く人達の多くが、そこに泊まっているという。

そんなある日、二人の少年少女が、その建物の前に落ちてくる。

いく当てのない彼らは、そこで働くことになる。

近々、世界を揺るがす大事件が発生するとも知らずに……。

将吾「なるほどな。トリップ物というわけか」

里美「私達がその世界にいくことになってしまった理由とかも描かれるわけね」

そういうことです。

将吾「だから職業とかも紹介されてたのか」

とりあえず、テイルズキャラ達入り乱れの小説。

『Tales of the Connect』、乞うご期待!!

将吾「凄く微妙な所で切ったな、おい」

プロローグ

その昔、一つの大陸に四つの国があった時代。

自分達の領土を広げる為に、彼らは数多の戦争を繰り返した。

その犠牲は、決して少ないものではなく、大切な人を失った者もまた、決して少なくない。

その戦争は、数十年、数百年と渡り、世代までも移り変わり、続いていた。

しかし、その戦いにもある日決着がついた。

そのきっかけとなったのは、魔物の奔流。

彼らが戦争している暇などないことを悟られた瞬間であった。

その日を境に、四つの国は和解し、ひとつの国にまとめられることとなった。

以後、王は民より選ばれた一人となり、魔物の奔流も収まったことで、完璧なる平和が戻った。

時は流れ、数十年後。

その国は繁栄し、技術力等も向上した。

エネルギーは、世界樹によるマナを使っているが、そのマナを利用した技術等の向上は、

ここ数年めばしく進んでいた。

資源も豊富、技術も進んでいて、生活に苦はない。

これ以上の幸せが、どこにあるのか。

しかし、そんな幸せも、やがてある一つのことばかりかけとなり、徐々に崩壊に導かれていく。

それは、再来した魔物の奔流だった。

魔物達が街に流れ込み、人々を襲い始めたのだ。

このことによる被害は続出。

そこで、国は兵士を派遣するも、数が多すぎて帰り討ちに遭ったりしていた。

そんな時に発足されたのが、『ギルドハウス』だった。

民間人で建てられた物だったが、魔物退治からその他の依頼まで何でもこなすということで、

国公認の建物となったのだ。

このギルドハウスには、様々な人達が集まっていた。

剣士・魔術師・格闘家……。

いろんなものを武器にして戦う彼らは、今日も依頼を受け続けているという……。

2009年○月×日。

「さあて、早く帰って今日もテイルズやるぞー！」

柄にもなく帰り道を走る俺。

何だか高校二年生って気分じゃねえな。

おっと、俺の名前は桜咲将吾、16歳。

ぶっちゃけた話、かなりのテイルズマニアだ。

「まあ、それがなければ死んでしまうつてくらいじゃねえけどな」

誰に言うまでもなく、俺は呟く。

さてさて、早く帰つて、昨日買ったばかりのヴェスペリアのPS3版をやるとしますか!!

「……つて、何だあれ？」

ふと前を見ると、謎の光。

何だか、不思議な力が宿っているような……そんな光だった。

「何だろう、あれ？」

思わずその光に近づいて行く。

一歩、一歩、また一歩。

だが、その光に近づく前に、驚愕するような事態を目撃してしまう。

「な……に……」

飛び出している少年。

しかしその少年は、何かに躓いて転んだのか、転倒していた。

そして、近づいてくる、トラック。

「あ、危ない!!」

光のことなどどうでもいい。

今は、目の前にある一つの命を助けるんだ……!!

（ガンッ！！）

「ぐはっ！」

結果、俺はトラックに轢かれた。

少年は助けたけど、代わりに俺が轢かれた。

全身が痛い。

頭が痛い。

足が痛い。

腕が痛い。

膝が痛い。

肘が痛い。

腰が痛い。

「…………く、そ…………こんな所で、おれ、は、しん、じまうの、か…………」

意識が急速にひいて行く。

最後に俺がこの世で見た光景は、先ほどまで俺が見ていた光から、誰かが出てくるような瞬間だった。

世界を繋げる神って何だ？

「ん……」

ここは……どこだ？

何も見えない……何もない。

俺の体は……ある。

光はない。

誰もいない。

何も目に映らない。

「ていうか俺、死んだんじゃないか？」

……なら納得がいく。

ここは天国……いや、地獄？

もしくは、どちらでもないのかもしれない。

死者だけが分かる真実……天国も地獄もありはしないということか。

『いえ。あなたはまだ死んでないません』

「……はい？」

気のせいかな？

どこかから声が聞こえたような気がしたんだが……。

「……？」

辺りを見回してみても、誰の姿も見えない。

……幻聴かな？

『幻聴などではありません。それより、もっとよく眼を凝らして見てください』

「あれ？俺の心の中読まれてる？」

俺の心を読むとは……。

プライバシーの権利は！？

『ありません』

「ないのかよ！！」

こいつ……出来る！！

……ってか、姿がまだ見えないんだけど……って、あれ？
あっちの奥の方から光が見えるな……。

『ようやくと分かりましたか』

「……偉そうだな。誰だ？」

姿かたちはなく、ただの小さな光。

恐らく、そこから声が出ているのだろっ。

『私は、世界と世界を繋げる神……』

「世界と世界を繋げる神……？」

『そして、ここは死後の世界などではありません。何故なら、あなたはまだ生きてますから』

俺は、まだ生きてる？

でも、確かに俺はトラックに轢かれたはずなんだが……。

『あなたはトラックにはねられました……その事実を変えようがありません。しかし、今の』

あなたは、この世界に置かれることで辛うじて生きています』

「なるほど……俺はあんたに生かされてるってわけか」

『そういうことです……それで、突然ですが、選んでください』

えらい突然な話題切り替えだな。

「何と何を？」

『極端に言ってしまうえば……生きたいか、死にたいか』

「生きたいだろうな……そりゃあ。俺だってあんな死に方はご免だぜ」

『ですよ……ですが、あなたはもう元の世界に戻ることが今の所出来ません……文字通り』

「その世界の桜咲将吾」は死んでますから』

「今の所はってことは……いつか戻るのか？」

『可能性はあります……とだけ言います。なので、その方法が分かるまで、あなたには別の』

世界で生きてもらいます』

「……別の世界？」

やばい……話についていけねえ。

何だかいろんな情報が詰まってて、整理するのに時間がかかる。えっと、つまり何だ？

『さっきまで生きてた俺』は、すでに死んでしまっている。

けど、俺はここにいる……生きている。

だが、元の世界には帰れない。

故に、元の世界に戻るまで、別の世界で暮せ、ということか。

「……ふむ。本当なら死んでたんだ。それも悪くないかもな。生かせてもらえるだけラッキー

ってもんだな」

『ですが、これから行く世界は、少々問題がありますよ?』

「……具体的にはどんな?」

『ボサツとしてると、魔物に襲われる世界です』

「おい!!」

冗談じゃねえよ!

そんな所に、何も持たずに行けつてのか!?

『安心してください。武器ならこれを……』

「武器つて……え?」

ふと隣を見ると、どこから出て来たのか、日本刀らしきものが出て来た。

「これ……家にあつた日本刀……」

『……あなたの家にあつた刀を、今から行く世界にも通用するように力を込めた刀です』

「ふゝん……これさえあれば、護身用程度には役立つってことか」

『あ、それさえ持つてれば、魔法も使えますよ?』

なん……だと……。

それは……凄い!!

「なんだか、RPGの世界に行くみたいで、わくわくするぜ!」

『そう言っていたら、私としても嬉しいですね……ただし、向こうの世界では、

くれぐれも無茶はしないでくださいね』

……ところで、ひとつ疑問がある。

「なあ、その次の世界とやらに行く前に、一つ聞きたいことがある」
『何でしょうか?』

「何で……俺のことを助けてくれたんだ?」

最後に一つ、俺はそう尋ねた。
すると。

『……気まぐれ、です』
「え」

何とも微妙な理由を聞くとともに、俺の意識は急速に失われた。

初めての魔物討伐（笑）

「ん……」

意識が蘇ってくる。

先ほどまでの謎の空間などではなく、体は確かに、地面の上にあった。

アスファルトの感触が心地いいような……そんな気がする。

「何だろう……てか、ここ、どこだ？」

ふと後ろを振り向くと、大きな大きな家が一軒。

「……何だ、これ？」

てか、こんな所に建物が？

ここは、街外れだぞ？

てか、建物の後ろの方を見ると、海まで見えるぞ？

何なんだここ……。

「とりあえず、どこかに行ってみるか」

目の前の建物は華麗にスルーして、俺はしばらくそこら辺を歩いてみる。

……なんだか、この世界観、どこかで見たことのありそうな感じだな。

まずは街の中にも入ってみるか。

「……ん？」

ふと、ホットドッグの店を通り過ぎた時。
俺は、その値段を見て、驚愕した。

「一個……5ガルド？……って、ガルド！？」

そんな馬鹿な！？

あれはゲームの世界の物ではなかったのか！？
ていうかこの世界、もしかして……。

「テイルズの世界だと！？」

まずい……。

俺……俺……マジでテイルズの世界に来ちまったよ！？

すげえ！！

テイルズは好きだけど、まさかその世界に来れるとは夢にも思っ
てなかったぜ！！

これは柴倉に自慢するしか……しようにも出来ないわけだが。

「だから、魔物とかもいるとか何とか言ってたわけか……なら、魔
物を討伐しに行くでしょう」

「

やっぱ、この世界に来てからすることって言ったら一つだよな！

それは……魔物やつつけること……！！

……俺、戦闘狂じゃないはずなんだけどな。
日本刀だけに。

「……さて、行くか」

俺は、魔物が住んでるだろうと思われる森へと足を運んだ。

「ひゃゝ雰囲気出てんな、おい」

いかにも魔物出ますよって感じの森。
うゝん、最高ですなゝ。

「おっと。そう言っている間にも、オタオター匹はっけゝん」

俺の実力と言うのがよく分からないから、まずはこの程度でいいだろう。

まあ、剣道はちよっくらやってっけど……そんなの必要ないかもしれないな。

「とりあえず出せるかどうか分かんないけど……蒼破刃!!」

俺の武器から考えると、魔人剣は出せない。

だから、とりあえずはこの技を出してみた。

「ぴぎゃっ!」

「……出せちゃったよ、おい」

まじで……出るもんなんだね。
なら、ユーリを見習って……。

「円閃牙!」

剣をくるくると回して攻撃するこの技。
……思ったよりも出来るものだな。

「ぴぎゃああああ!」

とりあえず、まずは一匹殲滅完了つと。
意外といけるな、俺。

「あ、あの……」

「ん?」

その時。

誰かが俺に話しかけて来た。

ある日、森の中、エステルさんに、出会った

「その技は、ユーリの技です?」

ああ……この特徴的な話し方。

それに、肩くらいまでのピンク色の髪。

ふむ、この子は確か……。

「アンタの名前は……?」

一応名前を聞いてみることにする。
すると。

「私ですか? 私はエステリーゼって言います」

やっぱりか。

この子はヴェスペリアのエステルだ。

「エステリーゼか……いい名前だけど、ちょっと呼びにくいな
……エステルって呼んでも
いいか?」

「え?」

驚いたように目を見開く。

そりゃそうだよな……見ず知らずの奴に、いきなりそんな名前で呼
んでもいいかって聞く経験
なんて、普通ないからな。

ましてや、いつも呼ばれてる名前で呼ばれるなんて思ってもみない
だろう。

「あ、はい。いいですよ……」

心なしか、顔も若干赤い気がするが、この際気にしないことにする。

「んで？何でまたエステルはここに？」

「えっと……依頼で小麦を採取しに来たんです」

「小麦を採取って……」

マイソロかよ、依頼とかって……。

「エステル一人ですか？」

「いえ、もう一人居たんですけど、逸れてしまっ……」

「何だ、そういうことだったのか」

一人で来てたとしたら、こんな可愛い子を放っておく輩はいないだろうな。

「よかったな……一人じゃなくて」

「え？どうしてです？」

自覚なしってのは一番怖いよな。

「ん？そりゃあ、お前が可愛いからな」

「え！？そ、そんな、可愛いだなんて……」

おっと？

顔がさつきよりも赤くなってるぞ？

恥ずかしいのか？可愛いって言われて。

でも、本当のことなんだから仕方ないじゃないか。

「ところで、もう一人つてのは誰なんだ？」

「え？それは……頭にゴーグルをかけて、背が少し小さめの、可愛い女の子です」

ああ……頭にゴーグルをかけて、の部分で分かった。
多分そいつはリタだな。

「それなら、俺も付いて行つてやるよ」

「そ、そんな……悪いですよ！」

「大丈夫だ。それに、俺、今暇だし」

うん、やることなくて暇してたんだよな。

もしここでエステルと会っていなかったら、何もすることがなく一日を終えてたかもしれないし。

「……なら、お願いしても、いいですか？」

「ああ……そう言えば、まだ名前を言つてなかったな。俺の名前は桜咲将吾。将吾って呼んで

くれればいい」

「分かりました……それなら行きましょう、将吾」

お、いきなり呼び捨てか……割と嬉しいかも。

やっぱり、可愛い女の子に呼び捨てって、仲好くなってよかったって感じがする。

ま、今はそんなことよりリタを探さないとな。

「んで？その……えっと、なんて言つたつけ？」

「あ、リタです」

「そう。そのリタって奴とは、最後にどこで別れたんだ？」

俺はあくまでも知らないふりをする。

まあ、実は異世界からやってきていて、あなた達の正体も知ってます、なんて言われても、

正直言つて意味不だろうしな。

「えっと……何処で別れたんです？」

「いや、俺に聞かれても……」

どうやら、いつの間にかなくなっていたという、最悪なパターンだな。

「連絡して……と言っても、連絡手段はねえしな。どうすっか……とりあえず、一旦この森

出て、もう少し人を連れてくか？」

「そうですね……それがいいかもしれません」

と言うわけで、とりあえず俺とエステルは、森を出ることにしたんだけど……。

出れるのか？この森……。

天才魔導少女リタの登場！

さて、エステルと一緒に行動を共にするようにしたのはいいが。何しろ、俺はこの森について何も知らない。

よって、この世界の住人であるエステルに頼るしかないのだが……。

「あれ？」

「どうかしたか？ エステル」

「困りました……道に迷ってしまいました」

肝心のエステルがこれじゃあな……。

「えっと……マジで？」

「はい……割とマジで」

「……俺達、リタと会う以前の問題に、この森から抜けられるのか？」

「……どうなんです？」

お先真つ暗なんですけど……。

誰か、助けてください！！

「んじゃ、とりあえずまっすぐ歩いて行くしかないわけか……」

「ごめんなさい……私のせいでこんなことに……」

「謝るな、エステル」

エステルは何も悪くない。

悪いのは……運だ。

「俺達は運がなかった……それでいいじゃねえか。後、勝手にいな

「くなつたリタが悪い」

「そんな……リタは悪くないです！」

ふむ。

想像通りの、仲間想いの少女だな。

「まあ、そうだな……」

とりあえず、納得してみせた。
そのときだった。

「うおっ！」

何と、目の前には超ビッグな魔物がいるじゃありませんか……！
ただし、後ろ姿だけど。

「後ろ向いてるってことは、そつと抜ければ……」

「気づかれませんように、気づかれませんように……」

俺とエステルは、ゆっくりその場を立ち去ろうとする。
だが、その時俺達は見ってしまった。

「ちよっ……あれ、まさか……」

「リタ?!」

まさか、リタがいようとはな……。
これは少々予想外だぜ……！

「しかも、あの魔物に襲われてるようだな……」
「は、早く助けないと……！」

「分かってるつての！援護は任せたぞ、エステル！」

（カチャッ）

一度鞘に戻した刀を、もう一度引き抜く。

「まさかこんなに早くに強敵と戦う羽目になるなんてよ………まったく今日はついてないぜ！」

（ザシュッ）

後ろから一気に斬る。

だが、それだけじゃダメージは全然与えられないらしい。

「だ、誰アンタ！？」

リタは、俺の突然の登場に大層驚きを見せていた。
まあ、逆の立場に置かれたら俺の方が驚くけどな。

「そんなのは後回しだ！今はこいつを倒すことだけを考えろ！」
「わ、分かってるわよ——！」

そう言っと、リタは詠唱に入った。
後ろの方では、いつでも回復出来るようにと、エステルが………恐らくファーストエイドを唱えているはずだ。

「ストーンブラスト!!」

リタが攻撃に入る。

けど、相手はまだ立っている。

「ちっ!しつこいやつめ……これで眠りにつけよ、な!!」

(ダッ)

俺は前へ走り出す。

自分が出せる、最大限の速度で……!!

「いくぞ!殺劇舞荒剣!!」

反撃などさせるつもりはない。

この、荒れるような剣劇を喰らいやがれ……!!

「うおおおおおおおおお!!」

斬る。

斬る。

斬る……!!

とにかく、斬る!!

目の前の敵に、刀を入れていく。

その体、切り刻んでやる……!!

「ギアアアアアアアアア!!」

やがて、魔物は力尽きたのか。
光となって消えていった。

ギルドハウスって？

「ふう……」

なんとか終わった。

リタとの再会という目的も果たせたことだし。
俺はひとまずここで退散するとしましようか。

「じゃあな、二人とも。達者でな」

「ちよつと……待ちなさいよ!!」

ん？

「どうした？もう俺は用済みじゃないのか？」

「まだアンタの名前、聞いてないんだけど!!」

あ、忘れてた。

「まあ、俺の名前は桜咲将吾。将吾って呼んでくれて構わない」

「私はリタ・モルディオ。こっちは……」

「知ってる。エステルだろ？」

何せ、さっきまでエステルと行動してたんだ。

名前を知らないはずがない。

「名前も知ったところで、俺はここで退散する……後は二人仲良く、
この森を抜けるよ。」

じゃあな」

「……アンタ、この森の抜け方、知ってるの？」

「ギクツ！」

い、いきなり痛いところつくじゃねえかよ、モルディオさんよ……。

「それに、行くあてあるんです？」

「……考えてみれば、俺、行くあてないんだった」

「ほ、本当なんです！？」

あれ？

今、エステル、勘で言ってたの？

「本当の所を言うと、俺、この辺のこと全く知らないんだわ……」

「じゃあ、どうしてこんな森の中にいたのよ？」

「……何となく、かね？」

本当に、なんとなくでこの森に入ったんだよな。

行くあてないから、暇つぶしにっことで。

それで、エステルに会って、リタにあったと。

「……そう言うことなら、うちに来ませんか？」

「え？ エステルの家にか？」

「違うわよ。私達、ちよつとした事情があつて、今『ギルドハウス』
つて所にいるのよ」

ギルドハウス？

何だそりゃ、新手のマンションか？

「簡単に言つてしまえば、依頼受けて解決する、なんでも屋つて所
ね」

「思いつきしバンエルティア号じゃねえか」

「え？」

「あ、なんでもない」

そうか……この二人はバンエルティア号を知らなかったな。

……いや、エステルは知ってるじゃねえかよ、乗ってたんだから。けど、この世界はマイソロ2の世界というわけじゃないんだったら、知らないのも頷ける。

「見た所強そうだし、アンタなら仕事こなせるんじゃないの？」

「その依頼つてのは、危険なものもあるってことなのか？」

「たまにですけど……普段は、小麦の採取とか、魔物を何体か退治とか……そんな感じです」

ふん。

「まだ国に認められて日が経ってないから、そう大きな仕事はこないから、大丈夫よ」

「何が大丈夫なんだよ……で？俺はそのギルドハウスって所には行っても大丈夫なのか？」

「はい。多分大丈夫だと思います」

ふむ、興味あるな。

何だか、マイソロの世界に入ったような感じがして、面白い。

「どうせ暇だし、ちょっとくら行ってみるとするか」

「い、言っとくけど、アンタが道に迷って路頭に迷う様を見ると、胸糞悪くなるだけだから！」

別に、アンタのことを心配してるわけじゃないんだからね！！」

「はいはい、わかってますよ、モルディオさん」

「な、何よその笑みは！！ああもう、行くわよ！！」

恥ずかしいのか、顔を赤くして先を行くリタ。

「あ、待ってください、リタ！」

その後を必死に追いかけるエステル。

何というか……微笑ましいな。

しかし、ギルドハウスか……。

どんな所なんだろうな、一体。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 1

「着いたわよ。ここが、ギルドハウスよ」

おいおい冗談だろ……。

ここって、ついさっきまで俺がいた場所じゃねえか。

「これが……ギルドハウス？」

「そうですけど……何か問題があるのです？」

大ありだよ！

何でさっきまで俺がいた所の目の前の建物がそうなんだよ！
さっき見たばつかじゃん！！

「ここに……お前らが？」

「はい。まだここにいますよ」

まだいるのか……。

一体、どのくらいの人が住んでいるのだろうか。

「ただいま〜！」

（ガチャッ）

エステルが中にいるであろう人達に向かってそう言いながら扉を開ける。

その後に、リタ・俺という順番で中に入って行く。

「おかえりなさい。依頼の方は……って、その方はどちら様ですか？」

入るなり、受付らしき所に出てくる。

そこには、頭に海賊帽を乗つけた……男の子？いや、女の子がいた。

「あ、えっと……」

「桜咲将吾だ。そういうお前は……？」

「チャットです。このギルドハウスの依頼受付人を行っています……それで、何か依頼ですか？」

俺のことを客と思ってるみたいだな。
よし。

「なら、一つ依頼を頼んでみようかね」

「しょ、将吾？」

エステルは何やらオドオドしている。

これから一体何が起こるのか分からないと言ったような顔してるな。

「このギルドハウスを俺にくれ」

「断ります」

即答！？

「……冗談だよ。俺をここで働かせてくれ」

「……はい？」

チャットが聞き返してくる。
ぽかんとした表情を見せて。

「だから、ここで働かせてほしいって言ってるんだけど」

「……えっと、本気ですか？」

「ああ」

どうせ行くあてもないんだから。

ここで住みたいというのが本心だ。

何せ、サバイバルなんてのもきついしな。

「なるほど……そうくるとは思ってたませんでした。けど、僕がここ
の支配人をやってるわけ

ではありませんので、何とも……」

「いいでしょう。彼をここに置いても」

ん？

この声は、まさか……。

「ジェイドさん！」

やっぱり、腹黒メガネか……。

「おやあ？あなた今、心の中で考えていませんでしたか？」

「そういうあんたこそ、これからどう俺のことを虐めていこうかと
か考えてたんじゃないの？」

「ほお……何故そうお考えに？」

「メガネと長髪が組み合わさった男に、いいやつはいないからな」

「言いますねえ、あなたとはどうやら気が合いそうです」

「奇遇だな。俺もだ」

随分な年の差があるはずなのに、割と話しやすい感覚がする。これ、ひょっとして俺もSキャラなのかね……。

「な、なんだか怖いです……」

チャットが怯えちゃってるよ、なんか。

「それじゃあ、試しに一つ、依頼を受けさせてみてはどうですか？」
「早速ですか？」

てか、ここの支配人って、もしかして……。

「なあアンタ……名前は……」

「申し遅れました、ジェイドです」

「そう、ジェイド……お前が、ここの支配人なのか？」

「いえ。私ではありません。確かに、このギルドハウスは国の管轄となってますが、創設者

は一般のお方です。支配人補佐をしているだけです」

「補佐役か……」

なるほど。

何となく納得できた気がする。

「それで、依頼って？」

「そうでしたね。あなたに行って欲しい依頼。それは……」

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』

2

「この依頼です」

「ん？」

(ピラッ)

そう言つてジェイドは、一枚の紙を俺に見せる。
どうやらこれが、依頼書らしい。

「ガンジユの実の採取……？何だ、ガンジユの実つて」

「世界樹の森の中にある、『願いの木』に熟すと言われる実のことよ。その実は願いを一つ

だけ叶えてくれるつてことで有名なのよ」

「ふーん……さすがは天才。頼もしい知識の宝庫だな」

しかし、願いを一つだけ叶える実か……。

「何でまた、そんな実を？」

「この依頼をしてきた方の娘さんが、どうやら不治の病を抱えているとのことでした……」

「なるほど……その病が治りますようにって、ガンジユの実に祈るわけか……」

ありがちなことだが、しかし使い道は合っている。

こういう願いを叶えてくれるのが、『ガンジユの実』ってやつなんだろう。

「でも、世界樹の森って、どこなんだ？」

「この海を渡った、精霊島という所にあります」

ふむむ……なんだか、ダオスとかあらわれそうな雰囲気だが。

「とりあえず、その依頼を受けてみるかとするか」

「受けるんです？」

「ああ。力試しには持ってこいの依頼だから」

「分かりました。将吾さん、この依頼は後3名程上限がありますけど、どうしますか？」

最高四人までって所か。

ますますマイソロじゃねえか。

「そうだな……リタは？」

「私はこれから研究しなきゃならないことがあるから、パス」

「……エステルは？」

「私ですか？……行きます」

これで後二人か……。

せめて使えそうな人を探さないとな……。

「ん？そこにいるのは、誰だ？」

お、また新たな人の登場だな。

……金髪の騎士か。

あの顔は、多分スタンだな。

それに、妹のリリスも一緒だ。

「お兄ちゃん、この人、誰？」

「さあ……俺も分かんないなあ」

「俺は桜咲将吾。将吾って呼んでくれ」

しかし、この世界に来てからと言う物の、自己紹介ばかりやってる気がするな。

「俺の名前はスタン・エルロン。こっちは妹のリリス」

「初めまして」

改めてこう、間近で見えみると。

「美人だな……」

「へ？そ、そうですか？」

「ああ。美人だ」

率直な感想が、口に出てしまう程、リリスは美人だ。

……ん？リリスの顔が赤くなってるぞ。

それに、遠くのほうで、リタが何か分厚い本をこちらに向けて投げようとしてるぞ。

エステルなんか、しょんぼりしてるぞ。

「スタンさんにリリスさん。今、お時間はありますか？」

「ああ、全然大丈夫だけど……何か新しい依頼か？」

「はい。これから精霊島の世界樹の森に行っていたいで、『ガンジユの実』を取って来て

もらいたいんです」

「ガンジユの実って……何だ？」

「知らないの？お兄ちゃん」

と、ここでリリースは、スタンにガンジユの実のことを説明する。

「ふゝん。それを取ってくれば、なんでも願いが叶うのか」
「ただし、一個だけだけどな」

しかし、本当にそんな実があつたら、便利だよな。

……いや、この世界だから、そういうのもあつてもおかしくないか。
最近だと、『大いなる実り』なんてものもあつたしな。

……ん？

そう言えば、精霊島って、精霊闘技島と名前が似てないか？

「これで四人ですね。それではみなさん、頑張ってくださいね」
「なんだか、ジェイドにそう言われると、ム力つくんだけど……」
「まあまあ、落ち着いてください」

エステルが俺のことを宿める。

何というか、新鮮な光景だよな、これ。

何がともあれ、ガンジユの実を取りにいけますか。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 3（前書き）

まだまだ続きます、長編シリーズ

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 3

船を借りて、精霊島へと向かうこと、30分。

俺達は、精霊島入口へと辿りついた。

先客がいるのか、もう一隻の船があった。

「この船も、ガンジユの実を取りに来た人の船なんでしょうか？」

「分からない……けど、行くしかないな」

もう一隻の船でやって来た人物が何物かは知らないが、とりあえず、今は俺達の依頼を完遂することが大切だ。

「まずは……そこら辺をぐるりと歩くしかないな……」

「と言っても、この森結構広いですから、二手に分かれた方が効率がいいですよ？」

リリスの言うとおりだ。

「それじゃあ二手に分かれよう……スタンとエステル・俺とリリスという分け方でいこう」

「「え!？」」

驚くのは、エステルとスタンだ。

……何故に驚く？

「チームバランスを考えてだ。スタンとエステルなら、スタンが無鉄砲に飛んで行っても、

エステルの回復術があれば、なんとかなる。対してこっちは、結構戦略型だ。どうだ？」

バランスが整ってるだろ？」

「う……」

言い返せなくなる二人。

どうだ、俺の小さな脳で考えたチームは。

……言ってて自分が悲しくなってきた。

「さすがですね、将吾さん！」

「そうか？ありがとよ」

褒められたからには、素直にお礼を言わないとな。

「い、いえ、どう致しまして……」

だから、なぜここで顔を赤らめる？

この女性達は、何かあるたびに顔を赤くするのが一般的なのか？

「とにかく、このペアはもう動かさないから。はい、分かったら即行動！！」

俺とリリスは右を。

スタンとエステルは左を搜索することとなった。

S i d e リリス

将吾さん……。

突然ギルドハウスにやってきて、私のことを美人って言うてくれた、不思議な人。

「どうした？リリス」

「え？な、なんでもないですよ」

いきなり将吾さんがそんなことを聞いてきたから、思わず動揺してしまった。

……どうしたんだろう、私。

どうして、心が、こんなにも……。

「しかし、なかなか見つからないな……ガンジユの実」

「そうですね……リタさんから写真を貰ったはいい物の、そんな実、どこにも見当たらないですしね」

……これは依頼なんだ。

早くみつけて、病気の子を救わなければならない。

……だと言っのに、どうして、すぐにみつからないでほしいって思っちゃうの？

……どうして、まだ将吾さんこうしてたいって、思っちゃうの？

「リリース、リリース？」

「ひゃ、ひゃい！？」

「何だよ、その返事は……とりあえず、早めに探さないと、依頼人の息子さんの病気も

あるしな」

「そ、そうですね」

そうだよな。

今は依頼の途中なんだもんね。

私達は、そのまま搜索活動を続けることにした。
それにしても……この胸の高鳴りは、一体……。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』

4

しかし見つからない……。。

本当に実ってるのか？

その、ガンジユの実ってやつは。

「これほど探して見つからないとは……。噂は噂でしかなかったというのか」

「そうとも限りませんよ？そんな噂が広まるってことは、見たことのあるって人がいる証拠

かもしれませんし」

なるほど、そう言う考えもありか……。

悪意ある奴がそういう噂を流したと考える奴もいれば、最初に見た人がいて、その人が流した

噂だと考える奴もいるということか。

「ポジティブ思考か、ネガティブ思考かの違いかね」

「え？何の話ですか？」

「いや、なんでもない」

こんな話を続けたところで、ガンジユの実が近くなるわけじゃない。

「さて、早く依頼を終わらせて、息子さんを助けないとな」

「そうですね……」

ん？

今ちよっとリリースが寂しそうな表情を見せたような……。

「とにかく、怪しい所は片っぱしからつぶしていくしかないみたいだな」

「でも、その怪しい所というのも、いっぱいありますよね？」

「それは言うな、リリース……」

そうなんだよな……。

一番にして最大の問題点が、この森、怪しい所多すぎ……！どこに生えててもおかしくないわけよ、これが……！

「おかしいだろ、この森……」

さすがは世界樹の森。
タダものじゃないぜ。

「いやあ、まさか俺達、こんな森の中に来てしまつとはよ……こりやあ魔物の一体や二体は

覚悟しておいた方が、いい……よな」

「そう……ですね」

つて、あれ？

何だか、俺達の目の前に、魔物の集団がありません？
しかも、誰かを囲むように。

「……あれ、デジャブか？」

前にもこんな光景を見た気がするんだが……。
前は馬鹿でかい魔物で、リタが対峙してたな。
今回は……。

「ふむ。今回は……何だ、あの二人は」

金髪で、何か眼が赤い少年と。
茶髪で、何やら不思議な武器を持つてる少女。
ふむ。

あの二人は、ラタトスクの騎士でおなじみの、馬鹿ツプルだな。

「しかし、何でまたこんな所に二人で……」

「……もしかして、私達と同じ目的なのでは？」

なるほど。

つまり、あそこに停まっていた船の持ち主は、この二人ということか。

「どんな夢叶えたいのか知らないけど、ガンジユの実っていうのは、
そうたくさん実ってる

ものなのか？」

「えっと……実る時にはたくさん実るみたいです……大体は、見つ
からずにそのまま地面に

落ちてしまうみたいですけど」

なるほど。

その時偶然にひとつ拾った奴が、この噂を広めたということか。

「と、今はそれどころじゃねえな！あの二人を助けねえと……」

「私も加勢しますか？」

「いや、今回は俺一人がいい。リリスはそこで見ててくれ。第一、
女の子に怪我させたくない

からな」

「そ、そうですか？けど、くれぐれも無茶だけはしないでください
ね」

「分かつてる」

俺だって怪我したくないからな。
適当にあしらう程度に抑えとくつもりだ。

「じゃあ行くぜ……魔物共!!」

気合いを入れるように、俺は叫ぶ。
鞘に入った刀を抜き、構えをとる。

「それじゃあ……行くぜ!!」

(ダッ!)

魔物の群れに向かって、一気に走りだす。
まずは、一番近くにいる魔物をぶった斬った。

(ザシュッ!)

斬られた魔物は、何やら叫び声をあげる。
だが、そんなこと気にする余裕なんてない。
俺は、続いて別の魔物の元へと向かった。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 5

「喰らえ……蒼波刃!!」

しかし……なんて数なんだこの魔物は!!

「おいお前ら! どうしてこんな魔物と戦ってんだよ!!」

「うるせえな! 俺達だって戦いたくて戦ってるわけじゃねえよ!」

「え、エミル。落ち着いて!!」

何だか落ち着きのない奴らだこと……。

そんなことは今はどうでもいいか。

まずは、周りにいる魔物達をどうにかしないと。

「お前達、体力はもつか?」

「ああ……そんなの余裕だぜ」

「だ、大丈夫だけど……何をするの?」

「ちよつくらこの魔物全員をやつつける呪文を唱える。その間、お前達で何とかしてくれ……」

さつきは見てろって言ったけど、出来ればリリースも手伝ってくれ!!」

「わ、分かりました!!」

よし……出来れば全体に攻撃できるものがないな……。
ならば、これか……!!

「魔人剣!」

「サンダーソード!」

「天翔舞!」

みんなが頑張ってくれてる間に……。
……よし、そろそろだ!!

「みんな、離れろ!!」

(バツ!)

俺の叫び声を聞いたリリス達は、急いでその場から離れる。
それを確認すると、俺は呪文を唱え始めた。

「天光満つる所に我はあり、黄泉の門ひらく所に汝あり……出でよ、
神の雷!!……これで

決めてやる、インディグネーション!!」

俺が出したその技……インディグネーション。

全体に雷を落とす、とても強力な技だ。

確か、ジェイドとか、ラタトスクでのジーニアス、最近だとリタの
第二秘奥義がそうだったな。

(バツシャーン!!)

辺り一面に、雷が落ちる。

その雷によって、魔物達は全員焼き尽くされる。

「す、凄い……」

リリースから、そんな眩きが聞こえたような気がした。
ともあれ、これではらくは魔物に襲われる心配はないだろう。

「ふう……で、大丈夫か？お前達」

S i d e マルタ

「ふう……で、大丈夫か？お前達」

目の前にいる人が、私とエミルに尋ねてくる。

……何者なんだろう、この人は？

見ず知らずの私達を助けてくれて……まるで、あの時のエミルみたいに……。

……はっ！私は一体、何を考えた？

今、この人のことを、カッコイイって……。

「どうした？本当に大丈夫か？その女の子」
「え？あ、は、はい！大丈夫！」

思わず声が高くなってしまった。
恥ずかしくなって、顔が赤くなるのを感じた。

「それで、お前らはどうしてここに……聞かなくても分かるか」

ここに来た理由？

聞かなくても分かる？

……じゃあ、この人達も、私達と同じ理由？

「……まあ、『ガンジユの実』ってやつか？」

「……な、何故それを？」

エミルが驚きの表情を見せて尋ねる。

「分かるつての。こんな所、好き好んでくるやつなんかそうはいない。かといって、目的も

なく来るはずもない。そしてこの島には、願えば一つだけ願いが叶う、『ガンジユの実』

という実がなるという……つまり、ここまでの情報から一つの答えを導き出すとすれば……

お前達は、叶えたい夢があつて、それを叶える為に、その実を探してる、と」

「……全部当たりだ」

まさかそこまで考えられるとは……。
本当に、この人は何者なのだろうか？

「まあ、自己紹介とかは……今しちゃうか。俺の名前は桜咲将吾。お前達は？」

「俺は、エミル・キャスタニア」

「私は、マルタ・ルアルディよ」

「私はリリス。よろしく願いします、二人共」

互いに自己紹介をする。

……将吾って言うのか、この人。

……どうしよう、私。

エミルって想い人がいるはずなのに……。

「どうした？熱でもあるのか？」

「え？い、いえ、なんでもないです！」

突然の質問に、私は驚いてしまう。

「それじゃあ、ここからが本題だ……悪いけど、ガンジユの実を諦めてくれ」

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 6

「悪いけど、ガンジユの実を諦めてくれ」

そうは言ったものの、簡単に諦めてくれるはずがないよな。

「「なっ！！」」

ほらみる。

何言ってるんだ、こいつって目で見てやがる。

「俺達もよ、それなりの目的があつてこの島に来てるんだ。お前達がどういう理由でガンジユ

の実を探してるかは知らねえが、俺達には叶えたい願いがある。と言つても、それは俺達の

願いじゃなくて、俺達に依頼してきた奴のだけだな」

「な、なら、僕達が取つてもいいじゃないですか！」

ふむ。

いつの間にか、ラタモードが解けてるな。

「んじゃあ聞くが、お前らが叶えたい願いは、なんだ？」

「わ、私達の願いは……この世界から、争いがなくなること」

「争いがなくなること、ですか？」

リリースが尋ねてくる。

俺も同じ心境だ。

「私の両親も、エミルの両親も、戦争によつて殺された……だから、

「この世界から、争いがなくなれば……」

「それはちつとばかりおかしい願いだな」

「「!!」」

驚いたような顔を見せて、二人は俺を見る。

構うもんか。

俺は言つてやる。

「いいか？確かに戦争は悲しいことだ。大切な物を奪うし、残された者達は辛いだだけだ。けど、戦争はなくならない。何故だと思う？」

「「「……???」」」

今度はリリースまで加わったか。

まあ、それだけ言いごたえある内容だけだな。

「それは、俺達が人だからだ」

「私達が、人だから？」

「厳密に言えば、生き物だからだ……かな？生きているが故に、欲望も持つ。その欲望が、争いを生む……つまり、争いなくすには、この世の生物を絶滅させなければならぬんだよ」

極論だが、それがこの世のメカニズムだ。

他者がいるから、争いは起きる。

起こさないようにするには、争う相手がいなければいい。

最も、みんなが仲良くすればいいなんて考えもあるだろうけど、そんなのは無理だろう。

出来るのなら、初めからやっているだろうし、第一、そうするのなら、様々な我慢を積み重ねなければならぬ。

そんなこと、どんな願いでも叶う『ガンジユの実』に願うものじゃない。

「考えてもみる。その願いは、『ガンジユの実』に頼らなくても、いや、頼るだけ無駄な願いだろ」
「う……」

言葉に詰まる、エミル。

マルタも、その先の言葉が出てこないらしい。

「だから、俺達がその実を貰う。じゃあな、達者で暮らせよ」
「ま、待って！」
「ん？」

その場を去ろうとしたその時。
俺は、マルタに腕を掴まれた。

「まだ何か用か？」
「あうう……えっと……私達も連れていって」
「……はい？」

思わずリリースとハモっていた。

「僕達の願いは、『ガンジユの実』に頼らずに実現させようと思います……けど、あなた達の応援をするくらいなら、いいと思うんです」

「ほお……そこまで言うとは大したものだな」
「え、えっと、そうでもないです……けど……」

でた。

エミルの弱気癖。

「……分かった。着いて来たければ、勝手にしろ」

「「あ、ありがとうございます！」」

声を揃えて言ってくる。

マルタに至っては、俺の腕にマルタの腕を絡ませている。

……何だこの状況は。

「ちょっと！将吾さんに気安く触らないでください！」

……ん？あれ？

何でリリースが怒ってるんだ？

分からないまま、俺達は進んでいった。

言い終えた後に、俺はバルバトスの元まで走る。
なるべく速く。
なるべく強く。

「微塵に砕ける、ジェノサイドブレイバー!!」

バルバトスの斧より発せられる、まっすぐに延びる光線らしき物。

「甘い!!」

俺はそれを、横に移動することで交わす。

「てりゃっ!!」

（ガキン!）

奴の斧と、俺の刀が激突する。
そして発せられる、この衝突音。

「……ふん!!」

力任せに振られるその斧は、重い。

「ちっ! 重いなこいつ!!」

（ブン!）

なんとか振り切り、体制を整える。
しかし、こいつは単調だ。

相手としてやりあうには、俺的には助かる相手だな。

「ふう……」

（カチャッ）

「……なっ！？」

刀を鞘に戻すという俺の行動の意味が理解出来なかったのか。
スタン達は驚愕の表情を見せる。

「な、何考えてるの将吾！」

「そうですよ！今刀をしまったら、あいつに……」

「貴様……舐めてるのか？」

「来いよ」

一言。

俺はそれだけをバルバトスに告げる。

「ならお望みどおりに……真っ二つだ！！」

思った通りだ。

走ってこっちまで来やがって。

しかし、俺にもやったことのない技だが、出来るかね……。

「がはっ!!」

(ボタン)

斬られたバルバトスは、当然ながらその場に倒れる。
だが、奴の体からは血は出ない。

「……お前、時空間を行ったり来たり出来るのか？」

質問に答える声はない。

だが、バルバトスは静かに頷いたようにも見えた。

「……仕舞だ。もしもまた俺と出会ったりしたら、次は完全に仕留めてやる」

それだけを、俺はバルバトスに告げた。
だが、その時にはバルバトスの体は完全に消え去っていた。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 7（後書き）

次回で、「幸せを呼ぶ『ガンジユの実』」編は終わりになります。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 8

とりあえず、バルバトスは倒した。

『ガンジユの実』も集めた。

「よし。やることも終わったし、帰るか」

「そうだな……チャットに報告しなきゃならないし」

そう言つて、俺・スタン・エステル・リリスの四人は、ギルドハウスに帰ろうとした。

「ま、待つて！」

マルタに呼び止められた。

「何だ？俺達にまだ何か用か？」

「あ、あの……」

何なんだろうか、一体……。

「わ、私達も、そのギルドハウスで、働かせてもらえないでしょうか……？」

「……へ？」「……」

四人分の疑問の声が重なる。

エミルとマルタ以外の全員の、だ。

「何でまた？」

「私達……あなた達の役に立ちたいと思って」
「それで、せめて一緒に仕事をするだけでも、って思いまして……」
「……それを決めるのは私達じゃないんです」

エステルが申し訳なさそうに言う。

「そうなんだよな……」
「どうでしょう……」
「いいんじゃないか？つれてつても」
「……え？」「……」

今度は俺以外の五人の声が重なる。
いやあゝハモるの好きだねえ。

「事後承諾つてやつだ。連れてつちまえば、こっちの勝ちだろ？」
「確かにそうですね……」
「でも……いいんですか？」

エミルが遠慮がちに尋ねてくる。

「いいっていいって。俺もついさっきギルドハウスに入ってたわけだし」

「「ついさっき!？」」「」

エミルとマルタが声を揃えて言う。
いやはや、お似合いだねえ、二人とも。

「まるでカップルみたいです」

エステル、分かってるだろうけど、そういうことは本当は言つべき

じゃないんだぞ。

「なっ……！私とエミルが、カップルに……？」

「そ、そんなことないですよ！」

あれ？

エミルの反応はいいとして、マルタのその反応はなんだ？
ちつとばっかし、原作とは違うような……。

……ま、いつか。

この世界に、原作もくそも関係ないしな。

「よし！そうと決まれば、早速帰るか！！」

こうして、俺達の、『ガンジユの実』探索は終了した。

それにしても……一日の間にたくさんの出来事があったものだ。

「そういうわけで、よろしくな」

「どう言っわけですか。まだ何も聞いていないんですけど」

「いやぁ実は……かくかくじかじかで」

「それじゃあ分かりません!!」

小説なんだからこれで分かってもいいじゃない（メタな発言はちょっと…… BY筆者）。

「いや、実は……」

と言っわけで、俺は軽くチャットに説明を始める。
すると。

「だからさっきも言った通り、僕はここの支配人じゃないんですから、決めるのは僕じゃないんですよ……」

「分かってる。だから、ジェイドとかに言っといてくれ。それじゃあ、待つてください!!」

……そう言えば、部屋とかはどこに？

「ああ、部屋のことでしたら心配しなくても結構ですよ」

「いたのかよ……」

「ええ、ずっと」

あれ？

この会話、どこかで聞いたことのあるような……。

「空いてる部屋とかあっちゃう系？」

「はい」

何故語尾に『』つけるのかは置いて、それは助かるな。

「それじゃあ、エミル・マルタ。部屋に入るとしようぜ」

「はい」

「うん」

こうして、この世界での俺の生活が始まった。

しかし……これからどんな波乱が待ち受けているのやら。

幸せを呼ぶ『ガンジユの実』 8（後書き）

ようやくと長編が終わりました……。。

ビバ テイルズオブ 第1弾

ゼ「どうもー！今宵もやってまいりました、ビバ テイルズオブ。司会は俺様ゼロスと……」

ジェ「ジェイドです」

ゼ「いやあーまさかこんな小説でもこの企画があるとは思ってもみなかったぜ」

ジェ「本当ですね。またこの場に立てて、嬉しいです」

ゼ「その割には全然嬉しさを感じないんだが……ていうか、何で俺様本編で出番ないの!？」

ジェ「さあ？知らないキャラなんじゃないんですか？」

ゼ「いや、一番最初の登場キャラ紹介にきっちり俺様の名前載ってるからね!！」

ジェ「それじゃあ、この企画だけの出番とか？」

ゼ「そりゃあ冗談きついで……筆者様よ」

何故に私に振りますか？

ゼ「あ、いたの？」

え？何その扱い!？

ひど!!

ゼ「だって、俺様のこと全然出さないんだもん」

お前はもう少しあとに出番あるからそれまで待ってけ!!

ゼ「本当か？」

……本当に先の話になるかもな。

ゼ「おい!!」

ジエ「はははは。いいじゃないですか」

ゼ「全然よくねえよ!!」

将「あのよ……俺、いつになったら出てくればいいわけ?」

ゼ「おっと忘れてたぜ。本日はゲストを呼んでるんだったな……」

Tales of the Connect」で

主役をやつてる、桜咲将吾です!」

将「どうも。恥ずかしながら、やってまいりました」

ジエ「ええ、本当です」

将「……いっぺん、死んでみる?」

ゼ「とりあえず、長編「幸せを呼ぶ『ガンジユの実』」が終了した
記念……もとい、今小説の

開始記念として、このコーナーが設けられたわけなのですが!

!

ジエ「が、何でしょうか?」

ゼ「どうして登場人物紹介に載ってた里美ちゃんがまだこないの!
?」

それは……大人の事情つてやつで。

将「お前、まだ高校生だろ?」

あれ?

何で年齢とか言っていないのに、分かるの?

ジエ「そんなことは、お見通しつてやつじゃないですか?」

怖えよ!!

ジェ「まあ、とりあえず今小説のタイトルの意味でも聞いてみますか」

ゼ「あんた……よく筆者の発現スルー出来るな」

将「本当だぜ」

ジェ「今小説のタイトルである『Tales of the Connect』ですが、『Connect』を訳すと、

『関係』って出るのですが、これはどう言った意味なんですよっ？」

ああ、それは。

主人公である将吾と里美が、様々な人との関わりを持って生活していくストーリーだから、

このタイトルにしたんです。

将「まだあいつはこっちの世界に来てないのに？てか、どうやってこっちに来させるつもり

だよ。俺なんか、プロローグでいきなり事故ってんだぞ？」

それは仕方なかったの……！！

あれ以外思い浮かばなかっただけ……！！

ゼ「要するに、ネタ不足じゃないの？」

……ゼロス、出番なくすよ？

ゼ「ひどっ……！」

とにかく、そう言うわけです。

将「むちゃくちや不自然なまとめ方だな、おい」

ジエ「まあいいんじゃないんですか？ 筆者の駄目ツプリが見えるいまとめ方じゃないですか」

褒めるかけなすかどっちかにしてくれ……。

そう言うのが何気に心に響く。

ジエ「これはこれは、申しわけございませんね」

謝る気全然ねえぞこの人……。

将吾「そんなわけで、これからこの小説をよろしくな」

ジエ「司会私、ジエイドと」

将吾「将吾でお送りいたしました」

ゼ「いや、俺様だからね！？ 司会、ゼロスだからね！！」

来訪人は誰だろうか？

こっちに来てから、一日が経った。

つまり、ガンジユの実を取りに行ってから一日しか経ってないというわけか。

「本当に俺、この世界の住人になっちまったんだな……」

いやあ、現実味がねえなあ。

俺、すげえ体験したってことなんだよな？

本当に、テイルズの世界に來ちまったんだよな。

「まったく。今頃あっちじゃあ、俺の葬儀でもやってんのか？」

言ってる虚しくなるな……。

『あの世界』における俺は死んだ。

今は、『この世界』の俺として生きている。

……何だか、あんな世界でも懐かしいと思えるのは、どうしてなんだろうな？

「いや、違うか……こうした事態に陥ったからこそ、懐かしいって思えるんだよな」

とにかく、今日も元気に依頼をこなすのでしょうか。

……と、その前に朝食だな。

「ういゝす」

挨拶回りとかは、昨日の時点ですでに終わらせてある。
なので、一通りこのギルドハウスにいる人のことは把握したつもりだ。

「あ、おはよう。将吾」

「よう、カノン」

しかし、この世界では、『カノン・イヤハート』と、『パスカ・カノン』が双子だという

設定に変わっていると聞いた時は、本当に驚いた。

……いや、設定云々とかはこっちの話だけだよ。

「他のみんなは？」

「まだ来てないよ……今来てるのは」

「よう、将吾」

「ユーリか……よう。今度、一手組ませてもらってもいいか？」

ちよっくら、ユーリとは勝負してみたかったんだよな。

箱。やってた時から。

「いいぜ。いつかな」

「そんなときはよろしく」

「けど、将吾さんだって十分強いじゃないですか」

そう言って現れて来たのは、リリースだ。

どうやらパニールと一緒に食事を作っている最中だったらしい。

「そうか？俺なんかまだまだだぜ」

「謙遜しすぎです」

エステルまで出て来た。

まったく……こいつらとはすっかり打ち解けちまったもんだぜ。

まだ打ち解けられてない奴らも多数いるけど。

例えば、そうだな……。

（ガラッ）

お、ちょうど誰か来たな。

「おはよう、プレセア」

「……おはようございます」

そっけねえ……。

いや、元からそう言う性格なのは分かってんだけどよ。

「あー悪いな、将吾。プレセアはこういう奴なんだよ」

「分かってるよ。だから気にするな、ロイド」

感情がないのは、元々の設定だ。

だが、この世界におけるプレセアは、どう言った理由で感情がなくなっただろうか？

「あ、将吾さん。ちょうどいい所にいました」

「ん？チャットか？」

チャットが食堂に入ってくる。

何か用があるのだろうか？

「あなたに会いたいつて言う人が来てるんです」

「俺に？直々に？」

「はい。なので、朝食を食べたら、僕の所に来てください」

「分かった」

それだけを伝えと、チャットは食堂より出ていった。

「俺への客人か……ここに来たのは昨日の話だつて言うのに、何だつて会いたい人とか来るん

だらうかね……まさか、この俺に一目惚れした人とか？」

その時。

（ピクッ）

その場にいたエステル、たった今来たばかりのリタ、食事の手伝い

をしていたリリス、そして

何故かきつちりというマルタの肩が動く音が聞こえた。

……どうしたんだ、この四人は。

「まあ、そんなわけないか。俺なんかに惚れる奴はいないよな」

勝手に納得して、俺は朝食が出来るのを待つことにした。

お前かよ！

朝食を食べ終えて、俺はチャットのところに来ていた。
理由は、さっきチャットに呼ばれたからである。

しかし、俺に会いたいつて奴は、一体どんな奴なんだろうか？

「チャット、今来たぞ」

「待ってましたよ、将吾さん」

……あれ。

チャット以外の人影などまったく見えないのだが。

「ああ、今は化粧室にいますよ」

「化粧室って……」

要はトイレにいるってことか。

「しかし、将吾さんも隅に置けませんね。あんなに可愛い人がいるんですから」

「は？可愛い人？」

一体何を言ってるんだ？

この世界に来たのは俺一人の筈だし、こっちに来てからの知り合いと言ったら、このギルドハウスの奴らだけだぞ？
それでも多い方が。

「そうですよ。僕もあれだけ女の子らしくなれたら……」

「なれるさ、チャットなら。お前は磨けば輝くと思うぞ」

「え……それはどういう……」

「ちょっと！何言ってるのよ、将吾！！」

……え？

この声、まさか……。

いやいや、そんなことはないはずだ。

何であつちの世界にいるはずのアイツがこつちの世界に来ているんだ？

可笑しいだろ。

「……夢、だよな？」

「夢じゃないわよ。私よ、里美」

「……これは幻だ。そうだ、そうに決まってる」

「あの……将吾さん？どうして現実逃避をしてらしてるのですか？」

いや、だって……ねえ？

「何だって……お前がここにいるんだよ」

「何よ、いちゃいけないの？」

「そうじゃねえ。どうやってここに来たのかって聞いてるんだよ」

ことの真相を聞くために、俺は尋ねる。
すると。

「そのことなら後で話すわ。だから取り敢えずついてきて」

「は？……え、ちよっ……！！」

な、何なんだよ一体！

痛いって！

腕引っ張んなって！！

「あ、ちよつとの間将吾を借りますね」

「え？ちよ、ちよつと！？」

チャットが困ったような顔をして、俺達を引き留めようとする。

……けど、それは遅すぎた。

気付けば、俺は柴倉に連れられて、どこかに向かっている最中だった。

side チャット

な、何だっただんでしょう、今の人は。

将吾さんの知り合いだとは聞いていましたけど、結構強引な方なんですネ。

「チャット！」

「はい？」

ふと、どこから声がする。

その声の主は、どうやらカノンノさんのようでした。

「どうかしたんですか？カノンノさん」

「……今の人、誰？」

「え、えつと……将吾さんの知り合いらしいですけど」

僕は素直に答える。

するとカノンノさんは、何だか肩を震わせていて……。

「……追うわよ」

「へ？」

「いいから追うー!!」

(パシッ)

「え？」

腕を掴まれる。

そしてそのまま……。

「わ！ちよつとー!？」

「待てー!」

カノンノさん、それじゃあキャラ変わっちゃってますよ……。

里美の話

柴倉に連れられて、俺は海の方に来ていた。
何故かって？

別に泳ぐわけじゃねえよ。

ただ、内緒話がしたいって言うから、ここに来ているだけだ。

「それで、話ってなんだよ」

「……この世界に飛ばされてたんだね」

「は？何の話だ？」

「……私、将吾が交通事故で死んだって話を、今日学校で聞いたのよ」

「あゝそんなこともあったな。けど、それとお前がここに来た理由と、どう繋がるんだ？」

やはり、元の世界での俺は『死んだ』ことになっているらしい。
今の柴倉の言葉ではつきりした。

けど、その話と柴倉がこの世界に来たことと何の関係があるんだ？

「それは今から説明する。長くなるけど、聞いてくれるかな？」

「あ、ああ……」

そして、柴倉は語り出した。

s i d e 里美

今日も将吾とテイルズの話しよう。

最早習慣となっている私と将吾のテイルズ談義。

と言っても、私は将吾よりテイルズの知識はないし、追いつけない時もある。

けど、この時間は、とっても楽しい。

将吾にテイルズを薦めてもらって以来、私はかなりテイルズにハマっていた。

時間がなくてあまり出来ないけど、それでもこのゲームがきっかけで、将吾のことがまた一つ分かった気がした。そんなわけで、何時ものように学校に行ったけど……。

「おはよう〜!」

（ガラッ）

扉を開けて、中に入る。

「おはよ〜」

返ってくるのは、私の女友達の声だけ。

「おはよう……あれ、将吾は？」

何時もは席についているはずの将吾が、そこにはいなかった。
いないので、返事が返ってこなかったのは分かる。

しかし、何故今日に限って将吾は来ていないのだろうか？

「変な所で律儀な将吾君が、一体どこにいったんだろう……？」

だよね。

何時もはいるはずの将吾がいない。

何だか、嫌な予感がする……。

何もなければいいんだけど……。

（ガラッ）

その時。

ふと、扉を開く音が聞こえる。

入って来たのは、

「……皆さん、おはようございます」

先生だった。

将吾じゃなかった。

「今日は、皆さんにお知らせしなければならないことがあります」

何だろう？

何故だか不安が私の心を支配する。

「昨日、桜咲将吾君が……トラックにはねられてお亡くなりになりました」

……え？

今、コノヒトハナニライッタ？

「そ、そんなこと……嘘、ですよ？」

信じられなくて。

私は先生にそう尋ねた。
しかし。

「……」

先生は黙りこむばかり。

……どうして。

「何で……何で将吾なの！？」

柴倉里美は地球からログアウトしました。

Side 里美

「どうして……どうして将吾が」

帰り道。

私は、そんなことを呟きながら帰路についていた。

将吾がトラックにはねられて死亡した。

そんな事実を教師より伝えられた時、私はかなりのショックを受けた。

「何でよ……将吾。今日も一緒に、テイルズやろって言うてくれたじゃない」

止まらない涙。

当たり前じゃない。

いきなり……友達が死んだなんて事実を知らされたんだから。

「なのに、将吾ったら……トラックにはねられて……」

……会いたいよ。

とにかく今は、将吾に会いたいよ。

会って、たくさん話がしたいよ……。

『なら、話をしてみますか？』

「……え？」

突然、頭の中に響く声。

瞬間。

（パアッ）

「な、何？」

突然、辺りが光に包まれる。
そして、周りには何も見えなくなった。

「こ、ここは……」

『ここは世界と世界を繋げる空間の世界。そして、私がその世界と世界を繋げる神です』

「か、神様！？」

か、神様って……本当にいたんだ。
いや、それよりも……。

「世界と世界を繋げるって、どういうこと……？」
『それについては説明します』

説明ってなんだろう……？
とにかく私は、神様の話を聞くことにした。

『まず先に、言っておかなければならないことがあります……桜
咲将吾は、生きています』
「え！？」

将吾が……生きている？

けど、確かに私は今日、将吾が死んだって聞いたけど。

『そうでしょう。確かに、

「その世界の桜咲将吾」は死んだ。けど、別の世界にて、新たな生を受けているのです』

「……」

にわかには信じられない話なのに。
私は何故か、その話を信じていた。

「そっか……将吾は生きてるんだ……良かった」

『……あなたは、桜咲将吾に会いたいですか？』

「はい！！」

私は即答していた。

将吾に会えるのなら、どんなことをしてでも会いに行く。
その気持ちだけが、私の心の中にあった。

『すると、元の世界に帰れない可能性がありますけど……』

「構わない！将吾に会えるのなら、どんなことだってする！」

それだけ私は、将吾に会いたかったのだ。

『……なら、これを』

と言って、神様が私にくれたもの。
それは……。

「……杖？」

杖のような物だった。

いや、杖と言うよりは、よくゲームの魔術士なんかが使っような使っような、ロッドの部類だろうか？

『これを持って、あなたは将吾のいる世界にいなさい』

「え？でも、どうしてこんな武器を……」

『その世界には、魔物がいるからよ』

「へ？」

ま、魔物！？

そんな話、聞いてないんだけどー！！

「ちょ、ちょっと待って！」

『もう遅いです……行ってらっしゃい』

「ええええええ！？」

神様は、偉く強引な方だった……。

笑顔が一番

なるほど……またあの神様のおかげってことか。

「んで、こんな世界に来ちまった……ってわけか」

「うん……」

「けどお前、気づかなかったのか？」

「何が？」

「この世界が、どんな世界かってことを」

「……ん？」

分かってない、だと？

……そう言えば、柴倉のやったテイルズの中に、エターニアは入ってなかったっけか。

確か、お金がなくて買ってなかったんだよな。

「ここはな……テイルズキャラ達が入り混じった世界だ」
「……？」

分からない、と言った顔してやがるな。

つか、信じてないな。

なら、証明してやるか。

「おい、そこにいるんだろ、カノンノ！」
「え？」

俺は、草むらの方へと声をかける。
恐らく、俺の館が正しければ……。

「ど、どうして分かったの？」
「やっぱりな」

「コソコソとついてきてる感じはしたんだよな。」

「……チャットがついてきてるのは、多分カノンノに強制的に、だな。」

「んで、俺達の話盗み聞き、というわけだな」

「でも、話の内容なんて全然聞き取れなかったよ……」
「……あらそう？」

「この距離だから、ひよつとしたら……なんて考えもあったけど、そうでもなかったみたいだ。」

「え……将吾、これって一体、どう言う……」

「みたまんまの意味だ。それで現状を把握してくれ」
「現状を把握しろって言われても……あっ」

「どうやら気づいたみたいだな。」

「まあ、みなまで言うことはないだろう、柴倉」

「こ、これは一体……どういうことなのですか？」

「若干一名……いや、二名ほど、分かっている人がいる。」

「説明は追々するとして……まずはカノンノ。人の後をコソコソつけてきて……やっていい」

「ことではないよな。しかもチャットまで巻き込んで」

「う、ごめんなさい……」

「ふむ、素直なのは結構だな。」

……その素直さに免じて、今回は許すことにするか。

「今回は許してやろう……けど、もう二度とこんなことはすんなよな」

「は、はい……」

許してやったはいい物の、なんだか暗い雰囲気の流れる。
この雰囲気だけは、何となく打破したいものだな。

「ま、いつまでもそんな顔してても仕方ない。そんなわけで、ほら。スマイルスマイル」

「……??」

分らない、と言ったような顔で俺を見るカノンノ。

……まあ、最初はこんな感じだよな。

「俺はさ、カノンノの笑顔は可愛いと思ってるからさ。折角の可愛い顔が台無しだぞ」

「……」

「出た。将吾のスキルが発動されたわね……」

おい、柴倉。

何言ってるんだよ、おい。

「……将吾さんは、『女殺し』の称号を手に入れた」
「要らんわ!!そんな称号!!」

何気にノリいいな、チャット。
原作でもこんなキャラだったか？

「ま、まあ、とりあえずギルドハウスに戻ろうか……」

そう言つて、俺達は戻ろうとした。
その時だった。

「すみません。少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

ふと、背後から声が聞こえてきた。

金髪の騎士の名は……

「あ、あなたは誰ですか？」

カノンノがその人物に向かって尋ねる。

えっと、その人物の特徴は……。

金髪で、何か騎士が着るような鎧を着て、腰に剣をぶら下げてる。

……もしかして、フレンか？

「なあ、ひょっとしてアンタ、ユーリのことを知ってたりする？」

「え？ な、何故その名前を……」

やっぱりな。

もうこれは確信できるな。

「俺達のギルドハウスに、ユーリがいてよ。ちよいとアンタの話を聞いたってわけだ。で、

アンタはフレンって名前で正解？」

「あ、ああ……そうだけど」

思った通りだ。

「ふ、フレン!？」

里美、いくらなんでもそれは驚き過ぎだろ。

「な、何でしょうか？」

「い、いえ、特に……」

「なら驚く意味がねえだろうが」

とりあえず事情を知っていながらも、俺はそう言ってやった。

「それで、俺達に何の用だ？」

「いや、ユーリはどこにいるって聞こうと思ったけど……どうやら君達についていけば行ける」

みたいだから、ついて行くことにします」

「そうか……後、俺とアンタじゃ対して年離れてないんだろうから、ため口で構わないぞ？」

……あれ、ユーリとフレンって幼馴染なんだよな？
と言うことは、俺より年上ってことか？

「……スマン、俺の方が年下だった」

「？何で僕の年を？」

「いや、アンタってユーリと幼馴染なんだろ？」

「そうだけど……ああ、そう言うことか」

どうやら納得してくれたみたいだな。

「あの……それで、ユーリさんに何の話が？」

チャットが緊張するような感じで尋ねる。

そりゃあ、いつ口はさんでいいのか悩むだろうな。

「ああ、その話なんだけど……ユーリに会いたいって人がいるんだよ」

「ユーリに会いたいって人？」

それは皆目検討もつかないな……。

ユーリならもてそうな感じの男だから、むしろ分かりにくい。

「それで、その会いたいつて人は？」

「それなんだけど……さつき目を離れた隙にどこかへ行っちゃって……」

「あらま……」

そりゃあ大変なこった。

「じゃあ、俺が探してくるよ。お前らは、柴倉とフレンをギルドハウスまで送ってくれ」

「「「え？」「」「」

俺の提案に、四人分の声が重なる。

「そっちの方が効率がいいんじゃないかねえのか？柴倉とフレンは、ギルドハウスの場所を知らない

わけだし、俺もこの場所を回れて、効率いいだろ？」

「そ、そうですね……」

「けど、一人で大丈夫？」

心配してくれるのは嬉しいんだけど、俺は別に弱いわけじゃないから大丈夫なんだけどな。

「あんがと、心配してくれて。けど大丈夫だ。俺だって自分の身くらい自分で守れるって」

「そうかい？なら、頼もうかな」

「んじゃ、特徴を教えてください」

特徴を聞きだして、俺はその人物を探すことにした。

俺の秘奥義

つたく、この世界はなんて広い！！

疲れる……ただ歩くだけって本当に疲れる！！
せめて、話相手が欲しかった。

「ま、言っちゃってからじゃ遅いけどな」

後悔してるわけじゃない。

ただ……暇なだけだ。

「それにしても、特徴がこれとはな」

俺がフレンに言われた人物の特徴。

それは。

「弓持った胡散臭そうなおっさん、か……完全にレイヴンだよな？」

そう。

そんな感じの言葉だけで、一瞬で分かった。

けど、確かレイヴンってパーティーキャラじゃなかったか？

「まあ、おっさんなら、勝手に出歩くなんてことも考えられるわな」

何だか俺、じじくせえ……。

ともかく、今はレイヴンを探すことのみを考えるか。

「……無理」

女の子探すのならともかく、レイヴンのようなおっさん探すのに、そのこと考えるのは、難題極まりない。

ていうか、理不尽極まりない。

「ったく、何で俺引き受けちまったんだろうな……ああ、あのパーティーに入ってる、ろくなことがないって判断したからか」

このままあの場所にいたら、俺はきつとろくでもない出来事に巻き込まれることになるだろう。

……いや、十分にろくでもないことに巻き込まれているのだが。

「さて。とつと見つけて、さっさと帰るか」

と、気合いを入れた所での、

「……魔物だ」

しかも、4、5匹いる。

これは、迂回ルートを通れる……わけでもなさそうだな。よし、やるか。

「雷撃斬!!」

これは、俺が考えた技だ。ただ斬るだけの技なのだが、電撃効果も含まれている為に、威力もそれなりに高い。

「ギャッ!!」

(ボン)

はい、まずは一体。

「ぶぎゃ！」

「ちっ！」

魔物達が攻撃してくる。
俺はそれらを避けた後に。

「紅蓮剣！！」

斬り上げと同時に跳躍し、前方下部へ向けて炎を投げつけるこの技。
なかなか決まると気持ちいいぜ。

「次！鳳凰天翔脚！！」

さて、ここからあの技でも試してみるか……！！

「お前はここで死ぬ……！！」

告げてから、俺は思い切りのスピードで、相手に斬りかかる。
斬って斬って斬りまくる。

己が出せる最大限のスピードで、相手を斬る。

「これが俺の秘奥義だ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161h/>

Tales of the Connect

2010年10月13日16時19分発行